

平成 26 年度 広域科学教科教育学研究経費
研究報告書

世界の国際芸術活動から国際的美術教育実践の研究

プロジェクト代表
東京学芸大学 美術・書道講座
朝野浩行

共同研究者
イタリア国立カッラーラ美術学院
(Accademia di belle arte di Carrara)
ピエール ジョルジョ バロッキ教授
(Prof. Pier Giorgio Balocchi)

はじめに

この研究計画の背景には、本学における大学教育の中で教員資質を意識した人材育成教育を美術分野での教科教育から展開していきたい思いがあった。

平成 15 年度に東京都内で新任教員が職務に順応できず、1 年を満たずして多数の辞職者が出たことが新聞などで報道された。年々全国的に同様な傾向にあり、新たな教育課題となっている。

新任教員を送り出す教員養成大学では骨太の人材育成教育に更なる力を入れる必要を感じている。卒業生が新任教員として着任後、新学期をどのようにして学級運営をすればよいか、子どもたちとどのような話題をもって取り組めばよいか、生活指導上の課題の解決の方向性、国際理解等、課題が山積している。卒業生たちが 4 月 1 日から教員としてスムーズな運営をしていくためにどのように教員養成していけばよいか、現代社会におけるグローバルな視野を持てる人材を美術教科において結び付けられるものはないかと模索していた。その中で可能性を見出したのが「彫刻シンポジウム」をはじめとする「芸術イベント」での教育実践であった。

2010 年に著名な彫刻家であるセルビアのジョルジョ・チパヤック氏とオランダのカリン・ヴァン・オンメレン氏を本学の石彫研究室へ招いて「小金井国際彫刻シンポジウム」(2 週間の公開制作)を開催した。また、2013 年にはドイツの著名な彫刻家であるヨー・クライ氏を同じく石彫研究室へ招き「Jo Kley と学生たちの国際彫刻シンポジウム」(1 週間の公開制作)を開催した。いずれも本学美術科の学生たちの多数が携わり、積極的に参加した学生たちは卒業後も国際的な広い視野とプロ意識を持って各々の職場で活躍している。今後も国際的な「彫刻シンポジウム」や「芸術イベント」から新たな教科教育実践へつなげる研究として計画した。

研究概要

本研究では、世界の美術教育の伝統、現状、未来をテーマに探求し、各国々や地域の国際的美術教育の発展と国際理解力を要するグローバルな人材育成のために、これからの新しい美術教育のあり方を研究する

本研究の成果が様々な国と地域的美術教育の現場において、国際的視野、思考力、発想、創造、鑑賞能力を教育現場において教材開発につなげられることを目標とする。また、国際美術教育振興を世界に広く発展させていきたいと思っている。

世界における国際芸術活動の取り組みの研究から、主に国際芸術シンポジウムに着目して著名芸術家による本学公開制作及び公開講義を実施し、本学学生の国際的視野の拡張、芸術における仕事に対する姿勢や自らの表現を効果的にコミュニケーションが出来る国際的人材育成を実践する。

研究のねらい

国際芸術シンポジウムを開催することで、本研究に対して数多くの学生たちの参加が可能になり、本学において革新的な国際美術教育が実践できる。そして、教科教育への国際的な新しい教材開発を目的とする。

本研究により参加する学生たちは、「組織形成力」を総合的に習得できることが期待できる。そのことから、今後の教員採用試験や企業採用試験に大きな自信を与え、卒業して現場着任後も仕事に対して骨太の姿勢を保てる人材育成の機会となることがねらえる研究である。

国境を越えて学生の多くに見られる「組織形成力」といわれる能力が不足していることを重要視し、「企画力」、「開発力」、「進行管理力」、「交渉力」、「実行力」、「決断力」、「伝達力」、「外国人との国際交流力」といった様々な能力を学生たちが習得できるよう国際的立場から指導できる教育教材の開発を図る。

教員養成大学の美術における教科教育の展望と国際的発展を目標とする研究であり、人間形成及び情操的教育を兼ね備えた重要な教科であることを世界の教育から学び取り、国際的教育実践につなげる。

共同研究の分担

・朝野浩行（東京学芸大学）

中国、カナダ、アメリカ（ニューヨーク）で行われた国際芸術シンポジウムおよび国際芸術展の調査から国際的美術教育へ繋げる研究。Pier Giorgio Balocchi 教授による欧州の美術教育研究結果からグローバルな美術教育の考察。

・Pier Giorgio Balocchi 教授（Accademia di belle arte di carrara ,Italy）

ヨーロッパ各国の国際芸術シンポジウムの考察から国際的美術教育へ繋げる研究。国際芸術展の企画参与から教育につなげる考察。

研究報告 1

アジア圏の国際彫刻イベントおよびシンポジウム、ヨーロッパ圏の国際彫刻シンポジウムに参加した研究代表者である朝野浩行の経緯をもとに、各国々や地域の国際的美術教育の展望を考察した。

研究実践の内容は、2014 年年 8 月に中国・青島国際彫刻シンポジウムに参加し現地での制作および世界の作家たちとの美術教育の意見交換を積極的に交わし「アジアにおける国際芸術活動の取り組みと美術教育の研究」をテーマに考察していくと、このような国際芸術イベントから教員養成大学教育として幅広い領域の学生に対し、「研究のねらい」で述べた様々な能力を養成できることが可能であると参加した世界の作家たちとの共通認識を確信できた。

ヨーロッパ圏のルクセンブルグ国際彫刻シンポジウムには、同じく 2014 年 8 月の 2 週間

で世界各国の作家たちと共に現地制作および発表展示作業の国際芸術イベントに参加した。そこでは、公共施設における国際的な芸術表現、発表形態、展示模様、各国各々の作家によるプレゼンテーションを取材し、「欧州におけるにおける国際芸術活動の取り組みと美術教育の研究」の考察に取り組んだ。

このようにこの研究では、アジア圏の国際彫刻イベントおよびシンポジウム、欧米の国際彫刻シンポジウムおよび国際芸術イベントに参加したことをもとに学校機関での美術教科教育における人材育成を探求し、各国々や地域の国際的美術教育の展望の考察を柱として研究を進めた。

しかし、経費要求書に記載した研究計画を確実に遂行する予定であったが、2年目26年度配分額は、申請した金額の半分以下となり大きな削減があったため、26年度実施計画に基づいた取り組みを大幅に見直さなければならなかった。26年度実施計画内容のうち、学外者への調査旅費の削減があったため共同研究者（Pier Giorgio Balocchi 教授）を招聘して本学での講演や国際芸術公開制作シンポジウム開催項目を見直し、研究代表者による現地調査の実施と現地での共同研究実践を行うこととした。

26年度の研究実践は、「アジアにおける国際芸術活動の取り組みと美術教育の研究」を引き続き調査し、中国・蕪湖 第4回 "Liu Kaiqu Award" 国際彫刻展 (The 4th "Liu Kaiqu Award" International Sculpture Exhibition) および中国・青島 中・日・韓 彫刻交流展 (Sculpture of China-Japan-Korea) の現地取材から、世界の中でも芸術市場が最も活発な中国における若手芸術家への育成を意識している国際芸術振興の実態を調査できた。

また、欧米における研究調査では、カナダ セントジョン国際彫刻シンポジウム (Saint John International Sculpture Symposium) (2014年8月～9月) で6週間の現地制作における活動から現地学生たちの国際芸術イベントに対する取り組みを調査した。その結果、シンポジウム招待作家の作業補助、シンポジウム運営補助、会場の案内補助などにより日常の大学教育 (カナダ現地) では習得できない様々な技術、能力、感性が高くなることが現地の補助学生たちから顕著にあらわれた。

また、アメリカ・ニューヨークで開催されたアジアウイーク展 (2015年3月) は全世界のコレクターが注目するアジア伝統美術の大規模な芸術イベントである。その取材において、多くの現地アジア人留学生がアジアウイーク展に携わり、留学先における自国の伝統芸術に対する誇りを持って関わっていることなどから国際芸術イベントから自己開発の人材育成へ繋げる可能性を得ることができた。

それらの成果から、今後の大学での教育上で国際芸術イベントへの積極的な学生派遣が新しい美術教育につながる手段となることが予想され、教員養成大学教育として学生に対し「企画力」、「開発力」、「進行管理力」、「交渉力」、「実行力」、「決断力」、「伝達力」、「国際交流力」を養成できることが大きく期待できる。そして、共同研究者であるイタリア国立 Carrara 美術学院の Pier Giorgio Balocchi 教授から大学教育において、様々な学生指導

法や教育理念のレクチャーを受けて、ヨーロッパにおける美術教育から教員養成大学の美術における教科教育の展望と国際的美術教育の発展に大きな期待を見いだせた。1年目の研究成果と合わせて、美術教科は人間形成および情操的教育を兼ね備えた重要な教科であることを確信して、国際的教育実践の研究を展開するとともに国境を越えて学生の多くに見られる「組織形成力」といわれる能力が不足していることを重要視し、国際的立場から指導できる教育教材の開発をねらうことができた。それは本学の教育において、今後の教員採用試験や企業採用試験に大きな自信を学生に与え、卒業して現場着任後も仕事に対して骨太の姿勢を構えられグローバルな現代社会に対する人材育成として活用できる。

共同研究者の所属校（イタリア国立カッラーラ美術学院）は芸術分野において特に彫刻の領域では世界的に有名であり、様々な国籍の学生が学んでいる。今後、本学と提携を結ぶ予定があり、学生交流を通して更なる国際的人材育成の教育へ繋げられる大きな成果が期待できる研究となった。

研究報告 2

ここでの報告は共同研究者である Pier Giorgio Balocchi 教授の「ヨーロッパ各国の国際芸術シンポジウムの考察から国際的美術教育へ繋げる研究」を記す。イタリア語原文を記載し、訳文を添える。

Per chi abita da queste parti, Torano è un piccolo villaggio sulla strada che da Carrara sale alle cave.

I dintorni di Torano sono però assai vasti. È capitato di parlare della “nostra” Torano Notte e Giorno a Bamberg, a pochi passi dalla Schloss di Memmelsdorf con il direttore della bamberghese Villa Concordia, o a Damasco sostando sulla via che da Damasco appunto va verso Palmira. I dintorni di Torano sono strettamente connessi con giornaliere frequentazioni di Seoul e Tokyo, o Mosca e New York e decisamente con una miriade di luoghi piuttosto lontani in quanto a chilometraggio e fuso orario: ovunque vi sia un luogo dove due scultori “del marmot” si incontrano ed iniziano a parlare. Così è abituale al bar per un caffè, a Torano, e trovarsi impergolati in una serrata discussione sulla Biennale di Istanbul o sulla Schweizerische Triennale del Sculptor in Bad Ragaz and Vaduz. E se, un avventore della storica lega dei Cavatori, insiste nel magnificare il

bianco, non trattandosi in questo caso di marmot, e probabile che venga contraddetto da chi, con competenza di causa e per nazionalita, precise le virtu del vino di Chios.

A Torano, da una dozzina d'anni, si tiene una mostra di scultura: "Scultura nei luoghi della Scultura" intensissima e stimolante per chi ne scorre I cataloghi dove si trovano raccolte le opera di un folto gruppo di scultori bene spesso affaccendati in mostre che vantano ben altri budget e di ben maggiore risonanza per I media. Torano ed suoi dintorni sono cosi: una piccolo mostra quasi nascosta nel paesino ma piccola delizia per palate fini, attenti a ricercare la qualita vera.

Anche quest'anno con le risorse di solito scares del Comitato, gli scultori che frequentano Trano ed I suoi dintorni daranno il via ad una mostra: dalla Germania, dalla Corea, dal Giappone, dalla Russia, dalla Grecia, dalla Siria, dalla Turchia, dalla Franci, dall'Inghilterra e via cosi. I dintorni di torano sono assai vasti e non conoscono confine per chi amala scultura.

Il filo rosso che unisce questi scultori e la consuetudine alla partecipazione ai simposi di scultura: un popolo di lapicidi viandanti nel mondo ovunque vi sia da scolpire, con un pensiero a Torano.

Torano, quest'anno offer una mostra di 67 scultori di alto livello e di ogni nazionalita, costituendo cosi una vera rassegna internazionale dedicate a quei maestri dello scolpire che da sempre partecipano a quella particolare espressione d'arte che e il "Simposio di scultura", oltre ad essere da tempo esponenti di spicco nelle varie Biennali.

A Torano si potranno ammirare le opera in marmo di professionisti e tanti altri uniti ad un gruppo di giovani scultori che lavorano a Carrara. Tutti questi artisti, abitualmente impegnati nelle maggiori mostre internazionali e nei simposi di scultura di tutta Europa, della Cina, della Turchia, degli Emirati arabi e della Siria, hanno accolto l'invito della "piccolo Torano" per amore passion: per il marmo e per i simposi.

上記イタリア語文章の中でバロッキ教授は以下のように考察している。

————— カッラーラ*の中心街から大理石の採石場の山へ上がる道の途中にトラノという小さな村がある。

トラノは世界の様々な国の彫刻家たちが住み、日々行き来する村である。この小さな街で

大規模な国際彫刻展を企画した。しかし、展覧会に対して村にはその予算は不十分であった。

村人たちは歴史的な彫刻の街で開かれる彫刻展を大いに歓迎している。

そして、イギリス、ドイツ、韓国、日本、ロシア、ギリシャ、シリア、トルコ、フランス等の作品出品者たちは、様々な国の境界を超えてトラノの特異な彫刻の歴史のある場所での彫刻展時に熱い情熱をかけた。それは世界的に有名になったカッラーラ国際彫刻シンポジウムの栄華復活に結び付ける赤い糸になると信じた。

67名の各国の彫刻家たちがこの企画に賛同し発表した。その半分の出品者はカッラーラ美術学院の学生を含む若い作家たちであった。

大規模な国際芸術イベントのほとんどは著名な作家たちで構成される。しかし、トラノの国際彫刻展では半数が学生を含む若い作家たちが選出され世界の著名な作家たちと競演する。それは世界的な大理石の彫刻の街のために未来への人材教育へとつなげる。———

—————*カッラーラは、イタリア最大の良質大理石の産地である。そびえる山々には大理石の採掘場が多数あり、ローマ時代の採掘場もあることから悠久の太古の昔から大理石を採掘している町である。その良質な大理石に魅せられて彫刻家たちが世界中から集まり、町にあるいくつもの彫刻工房で多数の彫刻家たちが仕事をしている。その中には世界各国からの留学生たちや世界的に著名な作家たちも数多い。カッラーラには多国籍の彫刻家たちが多く住んでいる。カッラーラで開催されてきた国際彫刻シンポジウムは世界的に有名で各国の著名な歴代彫刻家たちが参加してきた。しかし、残念ながら市勢や経済状況から1991年以降は開催されていない。—————

そして、さらにバロッキ教授は、人材育成のための国際彫刻シンポジウムについて以下のように考察した。

I simposio di scultura, nel senso “contemporaneo” hanno avuto inizio tra la Germania e l’Austria negli anni 50, con edizioni che comprendevano molta parte dei paesi dell’allora Cortina di ferro. Si puo dire che apparentemente fino da quell’epoca la politica era esclusa: siriani e rumeni, ad esempio andavano a fare il simposio “al di la del muro” e al di qua lavoravano scultori ugualmente impegnati.

Celebre quello di Grenoble (curato da Guadagnucci nel 1967), quello del Giappone (con Signori negli anni 70) ed in seguito Delphi, Carrara, la Corea e il medio Oriente. Punto fisso per Torano quest’anno: tutti gli scultori invitati hanno partecipato e partecipano a Simposi, espressione particolare di scultura per gli scultori, situazione molto amata da

chi la pratica e notevolmente sottovalutata da chi pensava che sia poco intellettuale e del tutto sottovalutata da coloro che ritengono che la scultura sia una cosa solo da pensare e non anche da fare....Insomma per dedicarsi a scolpire, ci vuole veramente passione.

Personalmente ho iniziato a sentirmi scultore molto presto, a vent'anni, e non avevo la più pallida idea di cosa fosse un simposio. Era una entità del tutto sconosciuta nelle scuole d'arte. Ed anche quando anni dopo ho iniziato ad occuparmi di simposi, "accademico" di educazione come ero, non ne avevo compreso la profonda e incredibile bellezza: come chi, pur possedendo un giardino non ne cogliesse il profumo.

Poi dopo esitanti e maldestre tentate, mi sono trovato catapultato vent'anni fa, in quella che l'amico Filin (che se ne intende) chiama ancora adesso la "guerra di Corea". Compresi allora come, in parallelo con lo scolpire, avessi fatto come chi mangiando noci invece del gheriglio ne avesse ingoiato solo il guscio.

Poi anche per simposi con la compagna e il cane in improbabili / impossibili / incredibili viaggi e diventata la parte centrale del mio essere scultore: della mia vita. E chi non è sbarcato sull'isola di Marmara da un traghetto carico di capre, camioni e turchi gentili che ti offrono chai o chi non ha passato la frontiera a me cara di Bad Al-Ahwa per andare a scolpire la pietra rosa di Palmira, troppo mi rammenta il personaggio di una novella di Karen Blixen che sosteneva come Cristo non potesse aver compreso fino in fondo poiché non era mai salito a cavallo.

Le mie personali "due strade" si incontrano nel luogo del viaggio.

以上の文章からバロッキ教授は以下のように考察した。

彫刻シンポジウムは1950年にドイツとオーストリアの間で歴史的な第一歩を踏み出した。

その時代は、シリアやルーマニアなどの芸術家たちは鉄の壁に閉ざされていたかのようにあったが、その壁を越えて各国の彫刻家たちは、彫刻制作の共有の時間を平等にもてることがシンポジウムでは約束された。それは明らかに政治的なものは除外された環境であった。

彫刻シンポジウムはその後も続き、1967年のグルノーブルで開催されたことや1970年に日本で開催されたことが現代の彫刻シンポジウムの基盤となった。そしてヨーロッパ各地、韓国や中央アジアに広がった。彫刻シンポジウムは現場での制作になる。選出された

一部の彫刻家たちは現場制作だけの意識にとどまり、世間からは過小評価とみる人もいるが、それは本来の彫刻シンポジウムの理念ではなく痛々しいことである。

彫刻シンポジウムは、彫刻制作に専念するという基本的な柱のもとで参加作家たちが時間や場所を共有してお互いの技術や能力を競い合い、または供給し合い、切磋琢磨しながら自分自身を成長させる情熱の場である。

私個人的には、自分自身が早くして彫刻家であることを意識し始めた。20年前まで彫刻シンポジウムに対して重要な意識を持っていなかった。しかし、それは未知の世界であった。芸術学校の教育のどこにも見当たらなかった。彫刻シンポジウムを理解しないということは、広い庭を占有できたとしても庭の美しさをつかめないことである。

それから数年後に私は彫刻シンポジウムに関わりはじめた。その現場は、まさに教育の現場であった。現在も私は、トルコなどの彫刻シンポジウムに参加しているのは、私個人の2本の道がそこにあるからである。それは、自分自身の成長の道と人材育成へ繋げる教育の道である。

まとめ

世界の国際芸術活動から国際的美術教育実践を課題としたバロッキ教授との共同研究は、多くの共通点から美術教科からグローバルなプロ意識を持てる人材育成につながる教育の可能性を見いだせた。

国際彫刻シンポジウムを軸として、芸術イベントによるアジアと欧米の2つの観点から国際的美術教育の探求および実践を経て、個々の参加作家の仕事に対する姿勢や自らの表現を効果的にコミュニケーションが出来る人材育成の開発を考察することができた。

国際彫刻シンポジウム（現地公開制作）が美術教育に深く関わりがあることが明確となりそれぞれの国際芸術イベントに参加した数多くの世界の学生たちは積極的な企画補助から制作補助に関わることにより、「組織形成力」をはじめとした前述の様々な「力」を総合的に習得できる実践結果が得られることが分かった。そのことから、本学の教員養成課程教育における教員の資質を持ったプロ意識の高いグローバルな人材育成に貢献できる方策が考察できた。

そのことは本学の学生に対し、教員採用試験や企業採用試験に大きな自信を与え、卒業して各々の職場着任後も仕事に対して積極的な姿勢を保てる人材育成の教育開発となる大きな成果となった。この成果により今後は、美術における教科教育の国際的な展望を目標

とする研究につなげられ、国際的美術教育の探求が進められる。現在、彫刻シンポジウム（現地公開制作）は世界各地の様々な国と地域で開催されている。このように世界中で開催されている国際彫刻シンポジウムが各国での教育機関で活用されていることも明らかになってきた。アジアと欧米のみならず各国の美術教育の教育的効果から日本の各教育機関で活用できるような教材の開発へと発展できる研究となった。

そして、今後の課題としては学生を中心にした国際色豊かな芸術イベントの企画、運営、開催を実現に向けて積極的に取り組むことであると考え。経費のかかることではあるが、バロッキ教授が開催した「トラノ国際彫刻展」のように志を共にした情熱ある組織を編成することによって実現できることが明らかになっている。本研究代表者が本学で開催した2010年と2013年の国際彫刻シンポジウムを継続していくことが本研究の成果を実証することになるだろう。

もう一つは、彫刻シンポジウムの独特な様式を他領域への応用を展開していくことがあげられる。絵画、音楽、スポーツ、様々な学問や理論系領域などにどのように関連させていけるか、さらにどのような活用法を見いだせて教育に活用できるかを発展させたい。

今回の共同研究によって、イタリア国立カッラーラ美術学院と東京学芸大学は協定姉妹校として手続きを進めることになった。近い将来には両教育機関から学生の交換留学により二国間の教育現場で同様の国際芸術イベントにおけるグローバルな人材教育が実現できるようになる。そのことは今後の改革が求められる大学教育に大きく貢献することになるであろう。

取材・調査協力機関

- ・イタリア国立カッラーラ美術学院
 - ・中国・青島国際彫刻シンポジウム
 - ・中国・青島 中・日・韓 彫刻交流展
 - ・中国・蕪湖 第4回 "Liu Kaiqu Award" 国際彫刻展
 - ・ルクセンブルグ国際彫刻シンポジウム
 - ・カナダ セントジョン国際彫刻シンポジウム
 - ・アメリカ ニューヨーク アジアウイーク展
- (順不同)